

ごごみ日和71

特集1：京都市ごみ減量推進会議設立20周年記念式典・記念講演会 開催レポート
ごみ減の20年を振り返り、

“これからの20年”を展望

特集2：「ありがとう」と「美味しいね」が溢れる
僕らの学び舎「東山総合支援学校」
～落ち葉がなくなぐ地域と生徒たちとの温かい交流～

Hand in Hand：料理コンテスト「エコクッキング ～大根まるごと一本使いきれ！～」に「チームごみ減」が出場

なごみ日和：京都マラソン2017
KBS京都アナウンサー 海平 和



京都市ごみ減量推進会議 HISTORY6：
10年後のごみ減は？明日に向かって…。

地域活動レポート：手から手へ 物が生み出す 多くの笑顔
フリーマーケットでリユースの場に
NPO 法人 プラスワンネットワーク



情報発信も時を重ねて20年

年4回発行を続け、71号を迎えた会報誌『ごごみ日和』。
一枚の紙を四ツ折にしたクロス8ページの折加工。
ホッチキスの針を使わない、環境に配慮した情報誌です。
ささやかだけれど、すべてが地球につながると信じて
地道な取組を積み重ねてきた20年。
これからも皆さんの活動や想いを8ページに詰めてお届けします。

ごみにまつわるこの数字なあに？

**全国で275の
自治体が参加**

答えはWebへ！

※トップページ「よもやま話 ごみ減のごみ袋」
をご覧ください。

「ごごみ日和」は、京都市役所、各区役所・支所のエコまちステーション、
京都市図書館、京都生協（市内店舗）などで手に取っていただけます。
最新号・バックナンバーもウェブで公開中！ <http://kyoto-gomigen.jp/>



手をとりあって ごみを減らそう！
京都市ごみ減量推進会議

🔍 検索

特集1



京都市ごみ減量推進会議設立20周年 記念式典・記念講演会 開催レポート ごみ減の20年を振り返り、 “これからの20年”を展望

表彰された4団体の代表者と来賓、主催者による記念撮影

京都市ごみ減量推進会議（以下、ごみ減）は平成28年11月、設立20周年を迎えました。市民・事業者・行政の三者協働による“ごみ減量”の取組を推進する組織として、平成8（1996）年11月にスタート。以来、ごみ問題を中心に、地域に密着した環境問題に取り組んできました。平成29年3月現在、その会員数は505、そのうち地域ごみ減量推進会議は201団体を数えます。

今回は、20周年という節目にあたり開催された「京都市ごみ減量推進会議 設立20周年記念式典・記念講演会」の様をお伝えします。

153名が一堂に会し、20周年記念式典を挙

平成28年12月18日（日）、京都タワーホテル9階、飛雲・紫峰の間において開催された「20周年記念式典」。これまでご協力いただいた皆さんに感謝の意を表すとともに、ごみ減のこれまでの活動を振り返り、さらなる発展につなげようと、会員有志の実行委員会を立ち上げ、準備を進めてきました。

当日、受付が始まると、会員・関係者らが続々と来場。153名の参加者が席につくと、山内寛副会長による開会宣言で式典が始まりました。司会は、平成27年度にKBS京都ラジオで放送した『コンパクトライフで、ごみ減量』のコーナーでパーソナリティを務められた対馬京子氏です。

まず、主催者を代表して高月紘会長が挨拶に立ちました。来賓をはじめ会員・関係者に向けて感謝の思いを伝え、「平成8年にごみ減を立ち上げた当初は、活動も細々としたものだったが、平成19年度から有料指定袋制の実施に伴う財源より補助金をいただき、一気に事業規模を拡大。活動の幅も広がっている。平成27年度の京都市民一人一日あたりのごみ排出量は417gまで減量。これは政令指定都市の中で最も少なく、当会議の活動も少しは貢献できているかと思う。さらに活動を発展させるため、これからも引き続きご協力をお願いしたい」と述べました。

続いて「来賓祝辞」では、着物姿の門川大作京都市長が登壇。20周年のお祝いの言葉の後、「京都市のごみの量は、ピーク時は年間82万トンだったが、平成27年度には44万トンに減り、処理費も138億円削減できた」と具体的な数字を挙げ、長年市政に貢献してきたごみ減の活動に感謝の言葉を述べられました。そして、「来年、京都議定書採択20周年を迎える。『合意が難しいと言われた京都議定



門川市長から熱のこもったご祝辞を賜りました

書が採択されたのは、京都で開催されたからだ」と会議の参加者が言っていた。京都に滞在し、自然と調和した京都の暮らしや文化を実感したからみんなが合意できたのだと。日本人が大切にしてきた“しまつ”“もったいない”という心、暮らしの美学は、環境に負荷をかけないこと。それをこれからも発信していきたい」と、熱のこもった祝辞をいただきました。

その後、「登壇者紹介」「祝電披露」と進み、次は「感謝状贈呈」です。当会議は平成8年の発足以来、パートナーシップの精神の下、市民、事業者等の会員はじめ多くの方々の協力や支援を得て活動を続けてきましたが、特にごみ減の事業の担い手として現在まで継続して、支えていただいている「京都市紙リサイクル事業協同組合」、「京都市ごみ減量めぐるくん推進友の会」、「京都府紙料協同組合」、「日本環境保護国際交流会（J.E.E.）」の4団体に、高月会長から感謝状が贈呈されました。

り、そして、2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックに向けての取組などについてお話しいたしました。

原田氏は、大阪商業大学准教授であり、保津川の環境保全に取り組むNPO法人「プロジェクト保津川」の代表理事です。「京都市の隣接市・亀岡でのごみ減活動の広がり」と題して、多くの住民を巻き込んだ保津川清掃活動の取組や、回収したごみの分析などを写真や動画を交えてお話しいただき、これらの活動を通じて、今後のごみ減の活動へヒントを与えていただきました。

記念講演会 ～20年の取組と今後の発展に向けて～

第二部では、崎田裕子氏と原田禎夫氏を講師に迎え、記念講演が行われました。

崎田氏は、東京に拠点を置き、環境省「中央環境審議会」の委員なども務める環境ジャーナリストです。京都市廃棄物減量等推進審議会の委員でもあり、京都市のごみ減量活動にも深い関わりを持つ立場から「ごみ減へのエールと、この20年の全国の動き」と題して、ごみ減が20年活動を続けてきたことの意義と、20年の全国的な動きの振り返

第二部の後半には、当会議の2R型エコタウン構築事業実行委員会の浅利美鈴委員長の進行で「ごみ減の20年とこれからの発展へのエール」をテーマに、崎田氏、原田氏、浅利委員長による鼎談が行われました。“京都ならではの”という視点で話が展開。京都市民ではない崎田・原田両氏に、外から見た京都のよい点や期待する点などさまざまな角度から論

じていただき、これからのごみ減の取組の方向性、次の20年で果たすべき役割など、熱い鼎談が繰り広げられました。最後は、浅利委員長が「皆さんが20年間で培ってきたことを受け継いでいく若い世代を育てるために、次の20年も元気に活躍いただきたい」という言葉で締め括り、場内から大きな拍手が送られました。

～以下、鼎談より抜粋～

「京都は長い歴史や文化が育まれた土地だが、歴史のあるところのほうが実はチャレンジ精神が大きい。今、全国で、2Rを徹底した地域づくりのためには、ごみ減のような連携の場づくりが大事だと盛んに言われているが、ごみ減は20年前にそれを始めている。市民・事業者・行政が輪をつくり、地域レベルで取組をしているのが素晴らしい。2020年の東京オリンピック、パラリンピックの時には、京都にもより多くの観光客がみえると思うので、京都に伝わる“しまつのこころ”をしっかりと世界に発信してほしい」（崎田氏）

「海外に行くとき京都の知名度の高さを感じる。京都議定書が果たしている役割は非常に大きい。中でも、祇園祭で20万食超がリユース食器に置き換わった話は、京都の人が思っている以上に、海外でも、日本の首都圏でも、驚きをもって受け止められ、世界から参考にされている。2018年9月8日に世界中でごみ拾いをしようという動きがエストニアから始まっている。日本でもこの取組の狼煙を京都であげたいと考えている。ごみ拾いも世界の人たちと一緒に取り組めば、次の20年はもっと素晴らしいものになるし、次の世代もしっかり育っていくと思う」（原田氏）



鼎談の様子。左から浅利委員長、崎田氏、原田氏

研究対象である“ごみ”をずっと見てきたが、20年で相当変わった。葉や大人用おむつが増えたり、食べるものが変わったり、高齢化したと感じる。おむつの話一つにしても、生きる力にも繋がることなので、これからのごみ問題は福祉や健康などと合わせ技で考えていく必要がある。皆さんから聞いた“しまつのこころ”を若い世代にも発信していきたいので、次の20年も元気で活躍いただきたい」（浅利委員長）

交流会で会員団体相互のネットワーク拡大を

式典・講演会の後は、会場を6階宴会場に移し、交流会が開かれました。

高月会長の「会員団体の交流を深め、ネットワークを拡大し、これからの



「残さず食べましょう」の乾杯発声で交流会はスタート

活動につなげてほしい」という挨拶で開会。続いて、乾杯の発声に立ったごみ減量事業化実行委員会の斎藤 敬委員長が「私たちが今、取り組まなければならないのは食品ロス。皆さん、今日は全部残さず食べましょうね！」と呼びかけて、日本酒で乾杯を行いました。128名の参加者が、立食スタイルで料理とお酒を楽しみながら歓談し、活気に満ちた交流会になりました。

交流会の中ほどには、音楽を通して環境活動を応援する、京都出身のシンガーソングライター秋人氏が登場。ギター

の生演奏で『Do you Kyoto? どうゆうこと?』など数曲を披露し、和やかな雰囲気を盛り上げていただきました。

最後に、この式典の陣頭指揮を取ってきた普及啓発実行委員会の中田富士男委員長から「式典に向けてがんばっていただいた実行委員の皆さん、お疲れさまでした」と労いの言葉が述べられ、大盛況のうちに幕を閉じました。今回、参加された方には、受付で、「風呂敷エコバック」が進呈されました。これは、わけあって処分されるはずだったふるしきを入手した、ふるしき研究会からあらかじめエコバック状に結んで提供されたもの。閉会後は、「風呂敷エコバック」に資料や記念品を入れ、大事そうに抱えて会場を後にする参加者の姿が見られました。

「京都市は環境活動のトップランナーである」。乾杯の発声の際の斎藤委員長の言葉です。記念式典・記念講演会を通して、ごみ減の20年の活動を振り返り、その果たしてきた役割を再認識するとともに、“これからの20年”を展望する意義深い一日となりました。



ズラリと並んだお料理は残さずきれいにいただきました

藤原幸子（平成28年12月18日取材）



近隣のお寺から集めた大量の落ち葉をたい肥化する様子

「ありがとう」と「美味しいね」が溢れる 僕らの学び舎「東山総合支援学校」 ～落ち葉がつなぐ地域と生徒たちとの温かい交流～

東山総合支援学校は、東山五条から南へ歩いて5分程、妙法院や京都女子中学・高等学校などが建ち並ぶ、落ち着いた街並みの中にあります。平成25年に白河総合支援学校の東山分校としてスタートし、平成28年4月からは東山総合支援学校として開校、3学年107名の生徒が在籍しています。京都市内には職業学科を持つ総合支援学校高等部が3校あり、この東山総合支援学校では「地域総合科」を開設、福祉分野における「地域コミュニケーション」を学ぶための学習グループ（専門教科）が充実しており、3学年を通して多彩な授業が行われています。「地域コミュニケーション」を学ぶとは、地域の様々な年代や職業の人と関わりながら、働くために必要な社会性やコミュニケーション力を育むことであり、生徒たちは、様々な環境や人との出会いの中で豊かな経験を積み、仕事との向き合い方を学んでいます。今回は、落ち葉たい肥を利用したキノコ栽培や交流農園の様子を中心に、学部長の箕 薫先生と、教科主任の藤川 知弘先生にお話を伺いました。

奥が深い、キノコ栽培

キノコ栽培は、まず菌床となる落ち葉を集めることから始まります。「毎年秋になると、近くの妙法院や三十三間堂、小松谷正林寺、そして泉涌寺を訪ね、境内の落ち葉を綺麗に掃除してもらいます。生徒たちにとってはお寺さんに出向いて清掃演習ができるのでとても勉強になりますし、お寺さんにとっては生徒たちが頑張って集めた落ち葉が、たい肥として有効活用されるのでとても喜んで下さり、良いことづくめです」と話されます。今ではお寺の方との信頼関係もでき、雨の日などはお堂の掃除や仏器を磨かせていただくなど、生徒たちにとって特別な時間でもあるようです。

集められた落ち葉は学校に持ち帰り、粉碎機で処理した後、米ぬかと混ぜ合わせて菌床を作り、滅菌処理後、キノ

コの菌を植え、地下室に並べてじっくりと成長を待ちます。これら全ての工程を生徒たちが順番に行い、収穫されたキノコは、月に1度、地域の社会福祉協議会が主催する「すこやかサロン」で提供したり、学校の門に入ってすぐにある「カフェしゅうどう」で販売したりします。すこやかサロンでは、生徒たちが調理のお手伝いもさせてもらい、「とても美味しかった」「いつも楽しみにしている」などの声を直接聞くことでやる気がアップし、自己肯定感を高めることにもつながっています。「この学校でのキノコ栽培は4年目になり、現在は、ヒラタケとシイタケを栽培していますが、滅菌の状態や気温など管理が難しく、今も研究の毎日です」と、生徒たちとの奮闘の様子を教えてくださいました。



落ち葉たい肥と米ぬかを、専用の袋に量り入れます



立派なヒラタケが育ちました

人も生き物も集まる交流農園に

校舎の西側にある交流農園は、元はプールだった場所を昨年の秋から再利用し、地域の人たちと一緒に農作業ができる本格的な農園になるよう日々手を加えています。野菜を育て始めてまだ数ヶ月ですが、既に20種類を超える野菜作りに挑戦しています。交流農園でも落ち葉たい肥は大活躍。完全無農薬栽培にこだわり、生徒たちは雨の日でも雪の日でも丹念に農作物を育てています。この冬は、大根、人参、小松菜、水菜や小芋などを収穫し、「すこやかサロン」で地域の人たちに食べていただいたり、「カフェしゅうど



ブロッコリーの収穫、地域の人と一緒に

う」で販売したりと、生徒たちが生産から販売・消費までの流れを学べる環境が整ってきました。来年度からは、もっと地域の人に農園に来てもらい、みんなで一緒に作業をし、収穫を楽しめる場となることを願っています。「失敗を含めて、僕ら教員も生徒たちと一緒に日々学んでいます。その積み重ねが僕たちの財産ですし、生徒たちの成長につながっているのだと思います」と、お話されます。農園には、鳥や虫などの生き物もたくさんやって来ます。命あるものが集い、互いに学び合うことの素晴らしさを改めて教えていただきました。



できたヒラタケをお寺の方にもお届けします

地域で学ぶということ

東山総合支援学校が地域の人たちに早くから受け入れられた理由のひとつとして、この場所が元修道小学校であったことが挙げられます。地域の運動会やお祭りなどは、今もグラウンドで開催されるため、生徒たちもスタッフとして参加し、運営を手伝います。地域の方からの「ありがとう」「本当に助かったよ」という感謝の言葉が、何よりも生徒たちの自尊心を高め、「ここに居ていいんだ」という自己肯定感を育てます。また、地域の皆さんと一緒に「すこやかサロン」や行事に関わることで、生徒たちが地域の一員として迎え入れられ、自分たちができることを皆さん

にしてあげたい、という思いが芽生えてきています。「この関係は本当に有難いことで、地域に支えてもらい、また地域の役に立てる支援学校として認めて下さっているなど感じています」と、先生方の言葉が続きます。近くの日サービスや保育園などにも生徒たちが出向き、教え教えられ、その一つひとつが得難い学びの場となっています。

落ち葉のたい肥がつなぐ、地域の絆、命の輪。地域と学校が互いに持てる知恵や力を活かしながら、世代を越えて共に学ぶ姿に感銘を受けました。

●東山総合支援学校

住所 ▶ 京都市東山区妙法院前側町441 TEL ▶ 075-561-3373

料理コンテスト

「エコクッキング～大根まるごと一本使いきれ!～」 に「チームごみ減」が会場

冬の食材の代名詞「大根」。この大根を無駄なくおいしく使い切る料理コンテスト「エコクッキング～大根まるごと一本使いきれ!～」(京都光華女子大学と京都市環境政策局ごみ減量推進課の共催)が同大学で開催され、我々、京都市ごみ減量推進会議のメンバー3名がこのコンテストに出場しました。

パンを包丁に持ち替えて

普段はこの会報誌「ごみ日和」の発行に携わっている3名。1人目は、同会議の理事で、ふるしき研究会の代表を務める森田知都子氏。出場メンバーのリーダーで、今回のレシピを考案! 2人目は同会議の理事で、この会報誌を発行している普及啓発実行委員会の中田富士男委員長。3人目は、会報誌小委員会の幹事で、この記事を書いている高野拓樹(京都光華女子大学准教授)。普段は京都市のごみ減量を啓発する3名が、ごみを出さない大根料理にチャレンジしました。



大根を料理するチームごみ減の森田氏(右)と中田氏(左)

チームごみ減「五味彩々大根」

森田氏考案の「五味彩々大根」。このレシピのポイントは、大根の葉・皮・茎の先まで使い切り、味の彩りを持たせた料理で甘・酢・辛などスパイスを効かせて変化をつけるところとのこと。「お肉と同様に大根にも料理に適した部位があり、そこを工夫しているのです」と力を込めました。



チームごみ減 森田氏考案の「五味彩々大根」レシピ。「五味」と「ごみ」をかけて、味の変化にユーモアもプラス!

大根料理が教えてくれた料理とごみ減量の関係

今回のコンテストに出場したチームは我々を含め6チーム。味や見た目の美しさ、調理の手軽さ、ごみが出ない工夫などが審査されます。「エコクッキング」というテーマにふさわしく、どのチームも普段は生ごみとして捨ててしまうような葉や皮もスバゲティに混ぜたり、油で揚げてチップにしたりと、エコ意識の向上と環境を考えたユーモア料理が続々登場しました。審査の結果、我々チームごみ減は、3位入賞の大健闘! どのチームも僅差でしたが、チームごみ減のごみを徹底的に出さない料理と、食器を洗う際も極力洗剤を使わないというエコへの姿勢は、参加者全員が感心していました。

本コンテストは、ごみが出ない環境に優しい料理のレシピを考案し、実際の調理を通じて料理の楽しさを体験するとともに、日常生活における環境に配慮する意識づけを推進することが目的です。コンテスト後には、京都市職員の方から「食品ロスの現状」についてもお話いただき、食品を料理することとごみ減量の関係について、改めて学ぶことができました。京都市ごみ減量推進会議は今後も、地域の皆さまとともに学び、ごみの減量に実践的に取り組んでまいります。



各チームから提案された大根料理を皆で審査

五味彩々大根レシピは、当会議ウェブサイトに掲載しています。ぜひ、作ってみてください!

<http://kyoto-gomigen.jp/works/153.html>

高野拓樹(平成29年2月7日取材)

なごみ
日和



KBS 京都 アナウンサー
うみひら なごみ
海平 和

●● 第13回 「京都マラソン2017」 ●●

2月19日に行われた、今年で6回目となる京都マラソン2017。京都には長い歴史を持つお祭りがたくさんある中で「新たなお祭りとしてもう定着したのでは?」と門川大作京都市長や京都マラソン応援大使の森脇健児さんが話したように、全員が主役、全員で作上げるまさにフェスティバル。そして進化も感じました。

京都マラソンのコンセプトの1つが、環境にいいことしていますか? という意味の合言葉「DO YOU KYOTO?」ですが、まず京都マラソンが素晴らしいのは、コースにごみ落ちていないこと。今年17,000人のランナーが駆け抜けた後も美しかったのは15,000人のスタッフ、ボランティアのみなさんの努力があるからです。笑顔での応援だけでなく、給食・給水の提供など常に選手に気を配っているからこそのおもてなし。また、これまでも給水は水道水、そしてマイボトル推奨、スタート直前まで着用していた防寒用の衣類は発展途上国に送られるというリ

ユース&リデュースは行われていましたが、今年もまた新たな取組が行われました。

「食品ロス」という言葉をご存じでしょうか? 食べられるのに捨てられている食品を指し、なんと国内での食品ロスは世界全体の食料援助量の2倍近い年間632万トンと推計されています。家庭から出される生ごみの中には、手つかずの食品が2割もあり、さらにそのうちの4分の1は賞味期限前にもかかわらず捨てられているようで、ごみ減量の大きな課題になっているのだとか。京都マラソンでは、給食・給水ポイントで様々な栄養補給が行われ、その種類の多さは大きな魅力の1つですが、不足しないように準備をすることでどうしても余ってしまいます。それらを、フードバンクの活動を行っている団体に提供する取組で、これらの食品は、同団体を通して福祉施設や、生活困窮者支援団体、子ども食堂などへ提供されるということです。

絆が広がる京都マラソン。沿道での50万人を超える応援のみなさんも、家族や友人だけでなく、一期一会の出会いを大切にされている方が多く、感謝の思いでつながっていることにも心が熱くなりました。

京都マラソン。まだまだどんな風に進化していくのか楽しみでなりません。



海平 和: 京都市出身、2010年KBS京都入社。テレビ「京スポ」「newsフェイス」、ラジオ「栢木寛照熱血説法こころのラジオ」などに出演中。

京都市ごみ減量推進会議 HISTORY

6

当会議は、平成28年11月に
設立20周年を迎えました。

10年後のごみ減は? 明日に向かって…。

「設立20周年おめでとう!」昨年12月に開かれた記念式典では、祝福の声が多く寄せられた。しかし、浮かれてはならない。なにせ、ごみを取り巻く問題が山積み。新たな課題も浮上する今、気になるのは「次」のこと。

京都市ごみ減量推進会議(以下、ごみ減)は、どこへ向かえばいいのか? 明日の方向を探るため、5名の役員に質問を投げかけてみた。

まず、はじめに問いかけたのは、ごみ減の評価。10点満点で採点してもらうと、平均8.5点と、高評価をいただいた。

次に、20年間継続できた原動力について。市民や行政の環境意識の高さ、高月会長の熱意などが記されていた。中でも「行政頼りだった問題を自身のことであると目覚めた結果」という答えは、市民参加ならではのメッセージであろう。

さらに、会員数について今後は増大か、質の充実かを尋ねてみた。平成8年発足当初の113から505(平成29年3月現在)へ20年を経て増大した会員数。会員の増大は命題だが、ほとんどが「質」との回答。「今後の課題のハードルは高い、会員の取組の質を高め乗り越えたい」との言葉がずしり響いた。

最後の質問は、10年後のこと。食品ロス削減に向けた取組への期待、福祉や教育など、幅広い分野との連携を踏まえたエコ・コミュニティづくりへの展望などが記されていた。

回答からは市民・事業者・行政の3者の協働による環境活動の担い手としての京都市ごみ減量推進会議への期待感が伝わってきた。明日も前を見て進もう!



森田知都子(平成29年2月14日)

地域活動レポート

手から手へ 物が生み出す 多くの笑顔



毎回たくさんの方が訪れています

1月29日(日)の朝、寒空の下にもかかわらず大変な賑わいをみせていたのは、京都市役所前広場でのフリーマーケット(通称、「市役所前フリーマ」)。

まちづくりやごみ減量の取組を長年続けておられるNPO法人プラスワンネットワークの協力のもと、京都市ごみ減量推進会議が開催しており、平成11年にスタートして今回が通算第226回目。今年度は年間16回開催され過去最大。市役所前フリーマの一番の目的は「ごみ減量の推進」。『いらなくなったらいる人へ』というキャッチフレーズのもと、京都市が進めている「ごみの発生抑制(Reduce)」と「再使用(Reuse)」の「2R」がここへ来て買い物をするだけで、意識せずに実践できることが大きな魅力です。出店できるのは、京都府内在住、在勤、在学の18歳以上の方で、お客さんは市内在住の方だけでなく、観光客まで多岐にわたります。ごみの発生抑制・再使用を重視したまちづくりの取組の一つとして、京都市内ではあたりまえになくならない場となっています。

続けて広がる、リユースの輪

市役所前フリーマの会場は毎回多くの人の熱気にあふれています。出店する方はもちろん、目的を定めて商品を探す方や、掘り出し物を求めて毎回楽しみにされている方など、みなさんそれぞれの目的で集まります。最も賑わう時間は、開始直後。一番商品が多いこの時間は、売る方も買う方も大忙し。ここでの醍醐味は、やはり売ると買う人の会話です。「これまで、インターネットのフリーマサイトなどでも売っていたのですが、数年ぶりに出店したとき、次に使ってくれる人と直接会話ができ、それが楽しくて、今年はお店3回目です。たくさん断捨離ができたので、とても気持ちがいいです。」という出店者の声を聞くことができました。お客さんからは、「実際に商品を手にとってみることができるから、安心して買える場所。値下げ交渉も楽しいです。」という声を聞くことができました。実際に商品を見ることができ、持ち主とも気軽に会話ができる、対面ならではの良さがあふれているように



売り手と使い手の会話もフリーマの醍醐味



子どもたちも真剣に商品を選んでいました

感じました。「テレビでフリーマーケットを知って、お母さんに頼んで初めてお店を出しています」というのは、小学3年生の女の子。出品しているものは、小さいころ使っていたおもちゃや小物など。その出品物に釘付けとなっている未就学の小さなお客さんたちは、保護者の方におねだりして、商品は次の子どもたちへ。出店して、次に使ってもらう人の手に渡る楽しさを実感したようでした。

売る・買うだけではありません

また、物を大切に長く使ってもらうためには、修理が必要なことも。年に数回、簡単な修理や相談ができる「もっぺん出張所」も出店されています。京都市内のさまざまなモノの修理店を紹介するウェブサイト「京のお直し屋さん紹介サイト もっぺん」に登録しているお店が、市役所前フリーマに来てくれることも。簡単な修理ならその場で対応できる場合もあり、気軽に相談していただけます。このような、かゆいところに手がとどくことも長年続いている秘訣なのかもしれません。

29年度からは岡崎公園へ

20年以上の歴史を持つ、市役所前フリーマですが、京都市新庁舎整備事業の工事等が始まることもあり、平成29年4月からは場所を「岡崎公園(左京区岡崎最勝寺町)」へ移し、新たな装いでのスタートとなります。

「フリーマーケットでの物の動きを見ていると、物が有効に使われ、ごみが減ることを実感でき、とてもやりがいがあります。」といわれるのは、プラスワンネットワークの篠部大五郎さん。京都は学生のまち、学生たちにももっと参加してもらえるような仕掛けづくりも手がけていきたいとのことで、今後の展開がますます楽しみです。

前田 綾(平成29年1月29日取材)

岡崎フリーマーケット 開催予定

開催日	雨天振替日	出店応募締切日
4月15日(土)	4月22日(土)	3月27日(月)
5月7日(日)	5月27日(土)	4月17日(月)
5月20日(土)	5月27日(土)	5月1日(月)
6月11日(日)	6月24日(土)	5月19日(金)
6月17日(土)	6月24日(土)	5月26日(金)
7月2日(日)	7月29日(土)	6月9日(金)
7月22日(土)	7月29日(土)	6月30日(金)

プラスワンネットワーク (<http://www.plusone.ne.jp/>)
京のお直し屋さん紹介サイト もっぺん
(<http://www.moppen-kyoto.com/>)